

中尊寺経蔵露盤羽目板の修復処理

(受託研究報告 第66号)

中里 壽克

1. はじめに

この露盤羽目板は中尊寺の経蔵に伝えられたもので、もとはこの経蔵の露盤の側面を飾っていたとの寺伝を持つものである。現状では風雪による木部の風化や腐朽が板表面全体にみられ、又一部には欠損箇所や割損を認められて、痛ましい状態にあった。

修復技術部は中尊寺よりの修復の依頼を受けて、平成3年度の受託研究としてこれを受入れ、修復処置を行った。

2. 法量と現状

羽目板は四枚ありいずれも栗の一枚板である。寸法は各板共ほとんど同寸であるが、若干の違いがみられる。この内東羽目板の大方の寸法を図に示した(図-1)。

表面の意匠は各板共彫込みによる香様を二個並列させ、その内に半肉彫で東羽目板は迦陵頻伽を彫出し、他の三枚はいずれも姿体を異にする孔雀文を彫出している。又各板の表面には黒色顔料が全面に塗付されているが、これは膠による油煙又松煙の彩色であろう。黒色顔料は風化した凹みや木割れ部にも入り込んでおり、後世に塗られたものである。当初何物かが塗られていたかは不明。裏面は周縁を巾45ミリほど削って薄くし、中心部には巾広の二本の縦溝を削出している。これは露盤の束の位置に相当したものである。

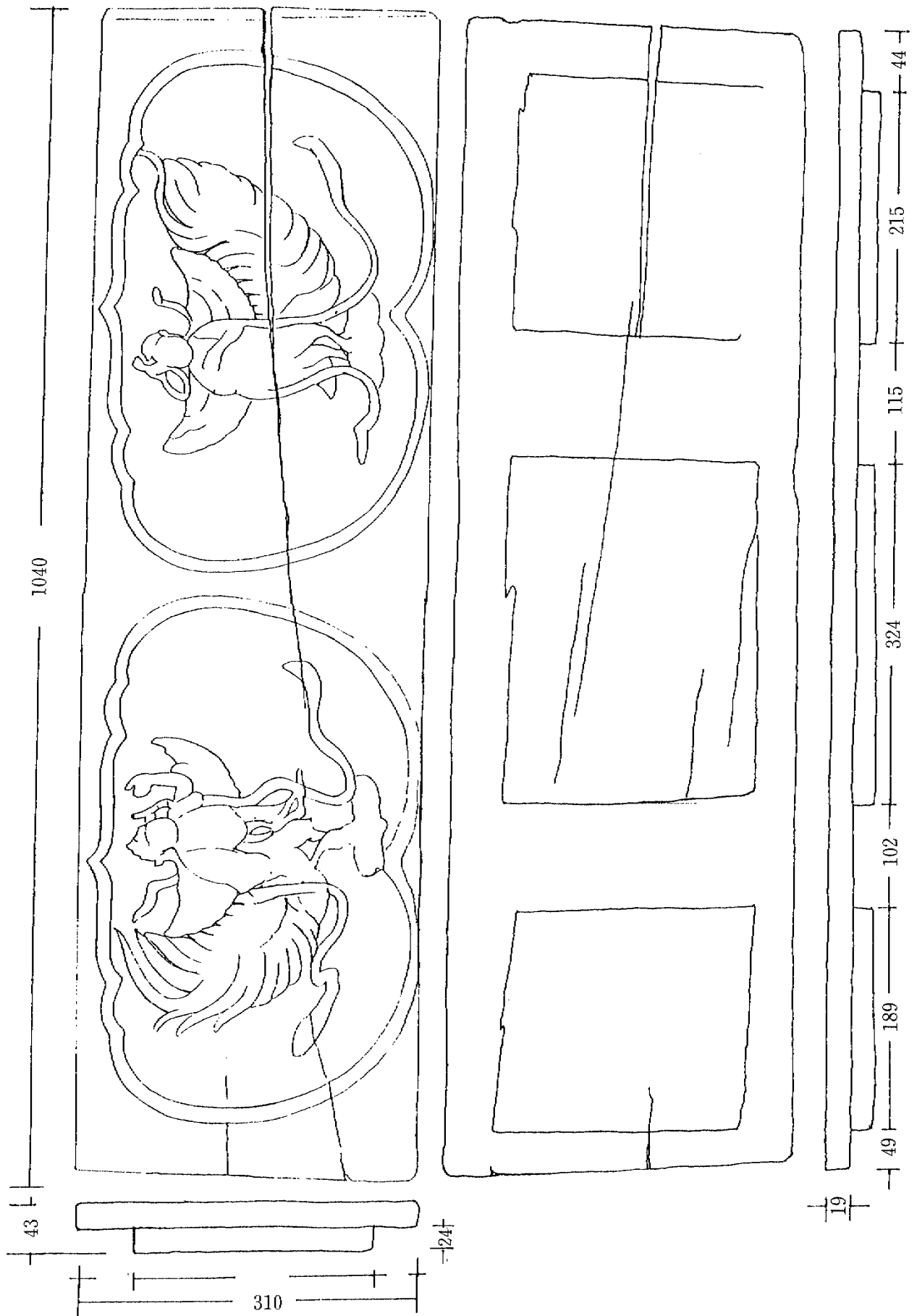
3. 破損状態

四枚の破損状態は一様でないが、各板を通して木割れ、欠損、割損、虫喰、風蝕がみられる。各板の状態は次の様なものである。(付図2-3)

- i) 東羽目板 板の右縁から中央に向って大きな木割れが入り、左縁からも小木割れが入って、それぞれの先端は向い合っており、板が割れる恐れがある(写真 1)。香様の一部に小さな欠損がみられる。
- ii) 南羽目板 上縁部に虫喰が目立つ。又下縁の一部には腐朽がみられ、フケた状態になる(写真 2)。孔雀文の表面には拓本墨と思われる汚染が全面にみられる(写真 3)。
- iii) 西羽目板 二つの香様の下縁部で欠損と割損がある。特に向って右下縁の欠損は大きく、20×10センチ程の欠失がある(写真 4)。又左下縁では10×5センチほどの部分が割損して本体からはなれ、一部欠失部もみられる(写真 5)。下縁全長にはフケがありかなり脆弱化している(写真 6)。
- iv) 北羽目板 下縁左部で少しフケが見られる他は比較的健全である。孔雀文の一部に虫喰による欠失部がみられる。

4. 修理方針

木部については現状を出来るだけ保持することに努めるが、虫害等による彫刻部の欠損、木質の風化による腐朽や破損・木割れ、塗装顔料の剥落等、現状を保持するのに困難な部分や、状態がひどく将来にわたって不安を残す様な部分は積極的に整形、補強する必要がある。表面の黒



图一 法量 (東羽目板)/单位mm

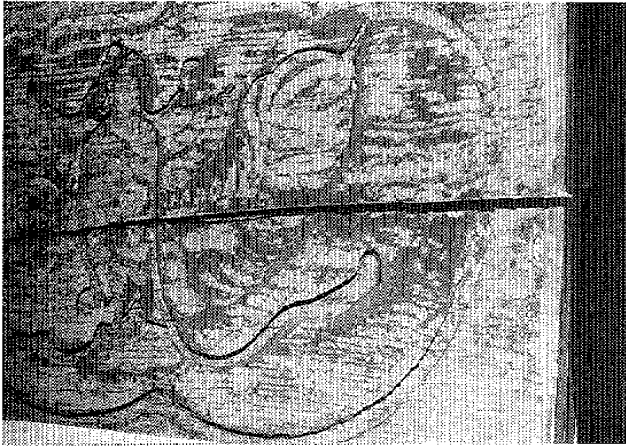


写真 1 東羽目板 木割れ部分

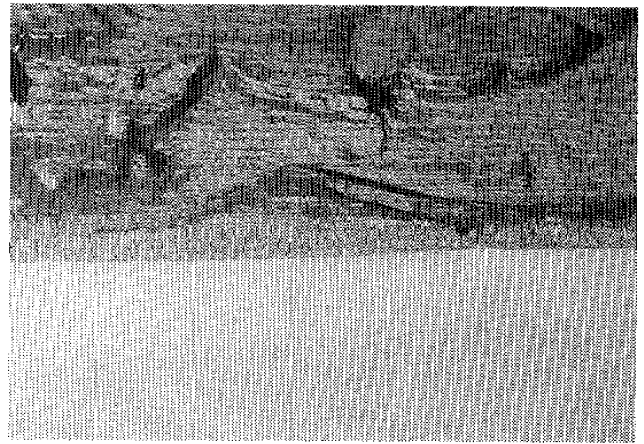


写真 2 南羽目板 下縁の腐朽状態

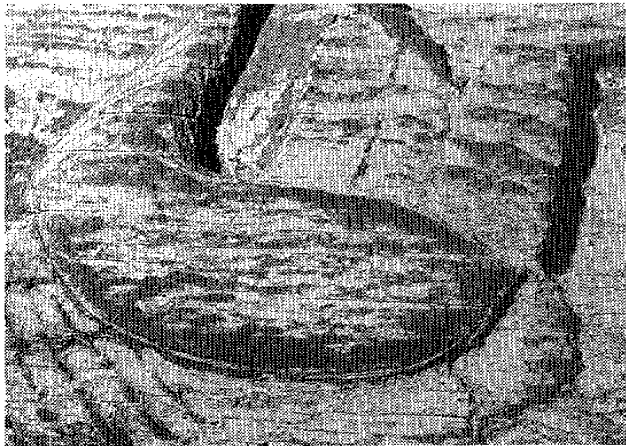


写真 3 南羽目板 拓本墨の現状

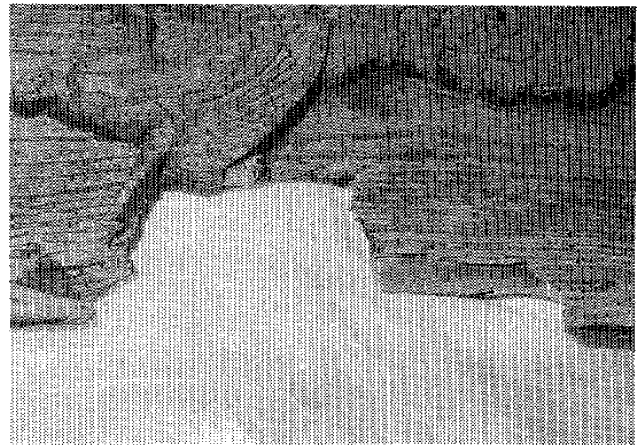


写真 4 西羽目板 欠失部の現状 (右)

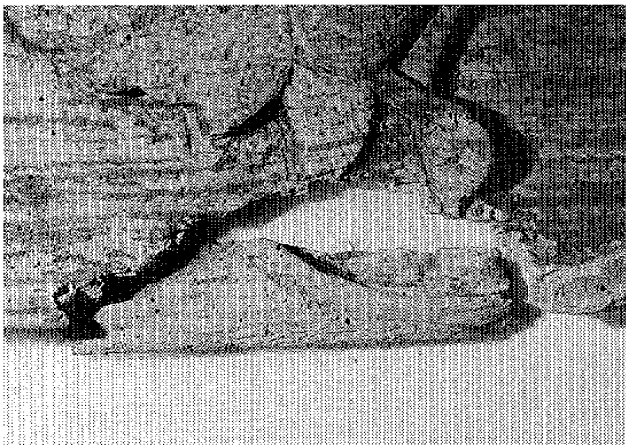


写真 5 西羽目板 欠失部の現状 (左)

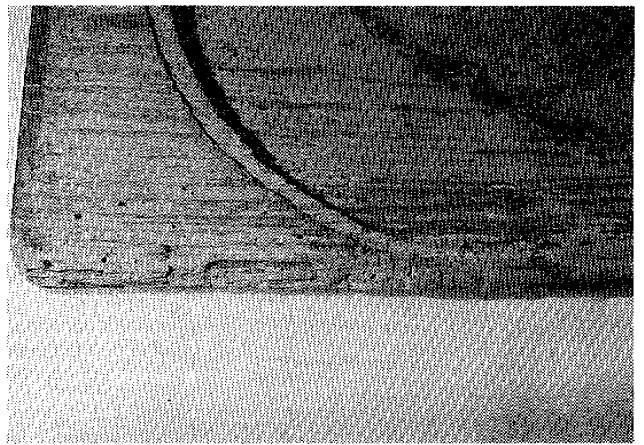


写真 6 西羽目板 下縁の腐朽状態

色の塗装顔料については、当初のものとは思われないが、現状で残すことに努める。南羽目板の表面に付着する拓本墨と思われるものは積極的に除去する必要がある。

又羽目板の保護のために本枠等を取付ける必要があり、これは別途考慮する。

5. 修復処理法

i) 剝落止 各羽目板にみられる黒色顔料については、素地が極端に変色しない程度に合成樹脂による剝落止を行う。

- ii) 拓本墨のクリーニング 南羽目板に著しく認められている拓本墨については、溶剤のシッフ法によって、出来るだけ除去する。
- iii) 木質腐朽部の強化 各羽目板に広く見られる表面の腐朽については、合成樹脂含浸による強化処置を行う。
- iv) 木割れ部の処置 東羽目板の木割れは進行し二つに割れる恐れがあるので、接着する必要がある。木割れの中は5ミリあるので、ここには薄板を挿入して充填し接合する。
- v) 木部欠失部の処置 西羽目板の木部欠失部は外観を著しくそこなっているため、別材を補填し整形する。補填の方法としては同種材を欠失部の形に合せて削り出し接着。周囲は可塑性の充填材で整形する。
- vi) 虫害部の処置 虫害による痕跡は各羽目板の表裏に認められるが、これらは可塑性充填材を出来るだけ充填する。
- vii) 彫刻欠失部の処置 香様形と彫刻部では虫喰その他で木部が欠失する部分があるが、これらの部分は可塑性充填材で整形する。

6. 修復処置の実際

処置はまず、修復作業を行う際黒色顔料の剥落を防ぐために、剥落止めを行った。パラロイド B 72 の 5%トルエン溶液を筆で全体に塗布した(写真 7)。合せて各羽目板の腐朽部分——特に下縁を中心とした脆弱部分には同 10%溶液を浸透させて、光沢が出ないか、強度が出るか等を確かめて、その処置を実施した。

次に下縁に欠失部を持つ西羽目板の修復を行った。欠失部はかなり大きいため、別材をもって補填することに決め、材種は異なるが木目の似通った檜材の板を欠失部の形に削出し、欠失する香様の形に彫出して局部に当てがい、チクソトロピックアクリル樹脂で点接した(写真 8)。補填材の表面は古色仕上げを行い、若干生じた当初材の空隙にはミルボンドによる樹脂刻苧によって整形した。

西羽目板の左側の小欠失部も同様の処置を行ったが、欠失部にはバルサ材を形に合わせて補填し、その表面はミルボンドによる樹脂刻苧で整形した。

東羽目板の木割れに対する処置は次の様に行った。木割れの中は5ミリほどあり、かなり広いので、バルサ材を削出して充填し、チクソトロピックアクリル樹脂で点接着し、表面及裏面には一段低くしてミルボンドの樹脂刻苧を充填し、その表面は松煙による古色仕上げとした(写真 9)。

大きな処置は以上の個所であるが、各羽目板表面には彫刻部に虫喰等による小部分の欠損部があり、一部は外観を損ねていたため、ミルボンドの樹脂刻苧による整形を行った。

尚、燻蒸は必要がないと思われたので行わず、又南羽目板の表面に見られた拓本墨と思われる黒色の汚れについては、各種溶剤による数回の除去処置でも好効果が得られなかったため、そのままとした。

7. おわりに

前述している様に、これらの羽目板は保存用の露盤形の箱を作製し、展示用を兼ねてそれに嵌込んだが、羽目板は取りはずしが可能な構造とした(写真 10)。ただ各羽目板は合成樹脂による強化は行ったが、それで充分とはいえないので、固定した木枠を取付けた。露盤形箱に嵌込む場合は木枠ごと出し入れするのが保存上有効と考えたためである。

この羽目板の製作年代は一応平安時代とされている。大きさが丁度金色堂の露盤と見合うため、

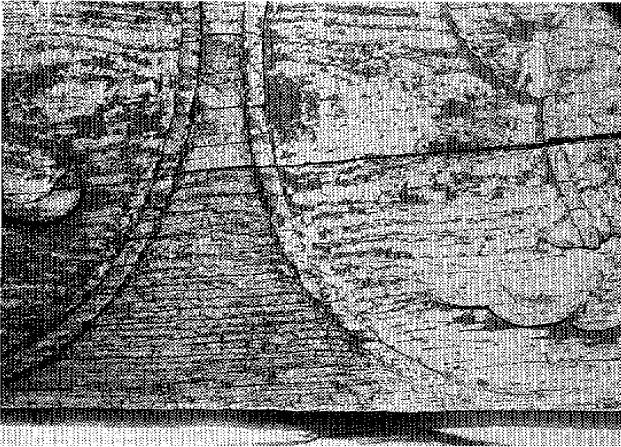


写真 7 東羽目板 表面の合成樹脂含浸

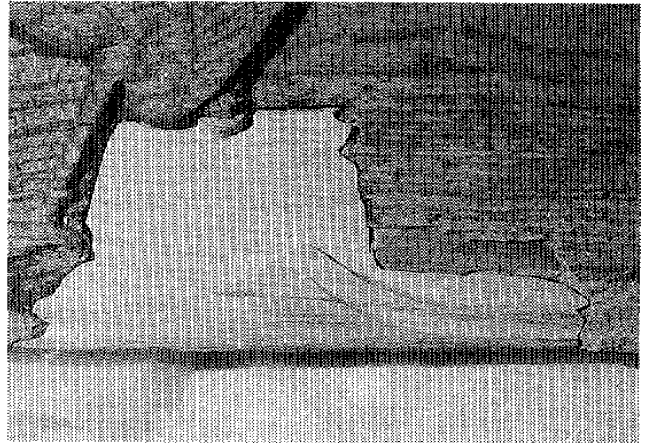


写真 8 西羽目板 欠失部の補填

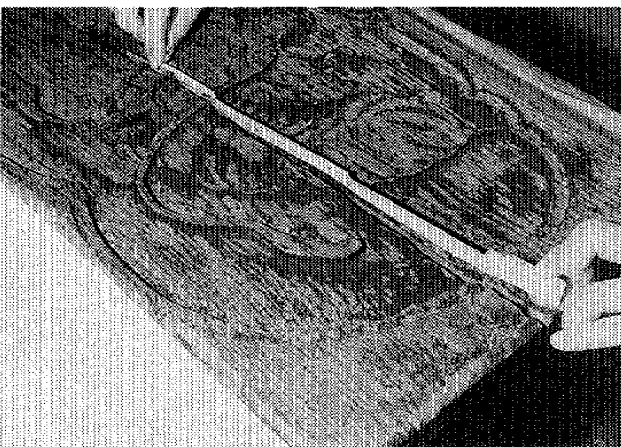


写真 9 東羽目板 木割部にバルサ材挿入

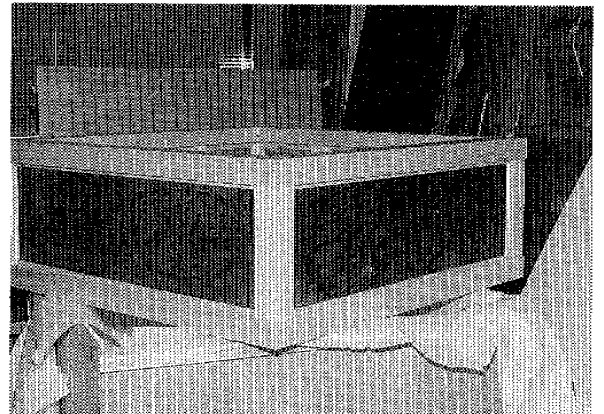


写真 10 完成

元は金色堂の屋根を飾っていたとの見解も示されている¹⁾。

しかし、用材が栗材と特殊であり、このような材が12世紀に用いられることが少ないこと、又香様の文様が金色堂中央須弥壇の文様とほぼ一致し、あまりにも意匠的に単純なこと、彫刻的に見ても技巧が素人くさく、立体感が表現されていないこと等から、近世ぐらいに地元の佛師が金色堂を参考に、何かの建物のために製作したものではないかと考えられる。たしかに露盤を飾ったことはその腐朽や表面の風化の度合でも知られ、その期間はかなり長期間であったことはたしかである。金色堂は今回まで数回のやや大規模の修理が加えられたが、その際に取付けられ、そして次の修理で取はずされた可能性もあるだろう。江戸時代、伊達藩による修理が行なわれたが、このあたりが一つの目安となるのではないか。

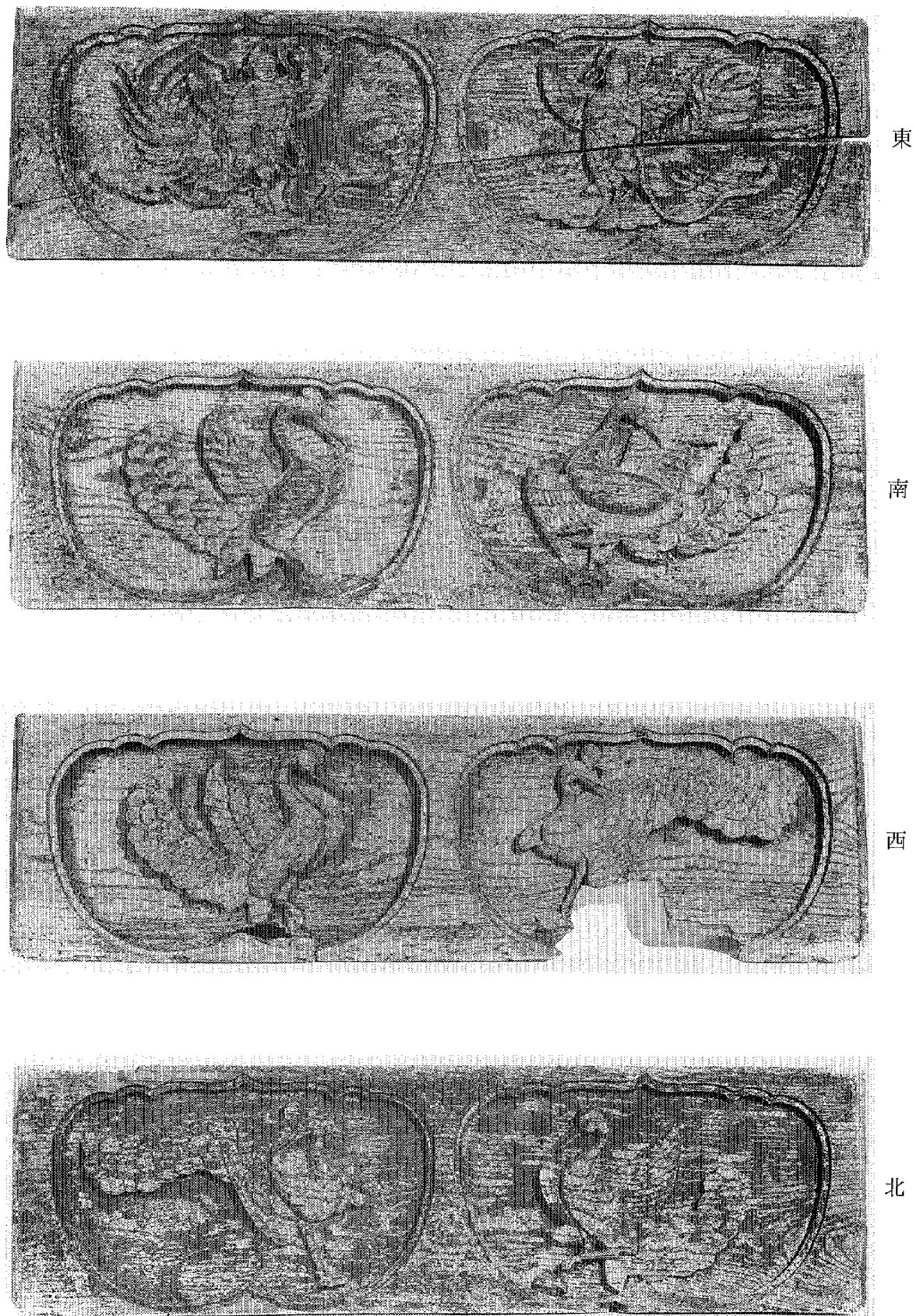
謝 辞

この受託研究の実施にあたり、御尽力いただいた中尊寺 破石澄元氏に深謝すると共に、修復の実際の作業を行った東京芸術大学美術学部修士課程工芸専攻（漆芸）の竹永幸代氏に記して感謝します。

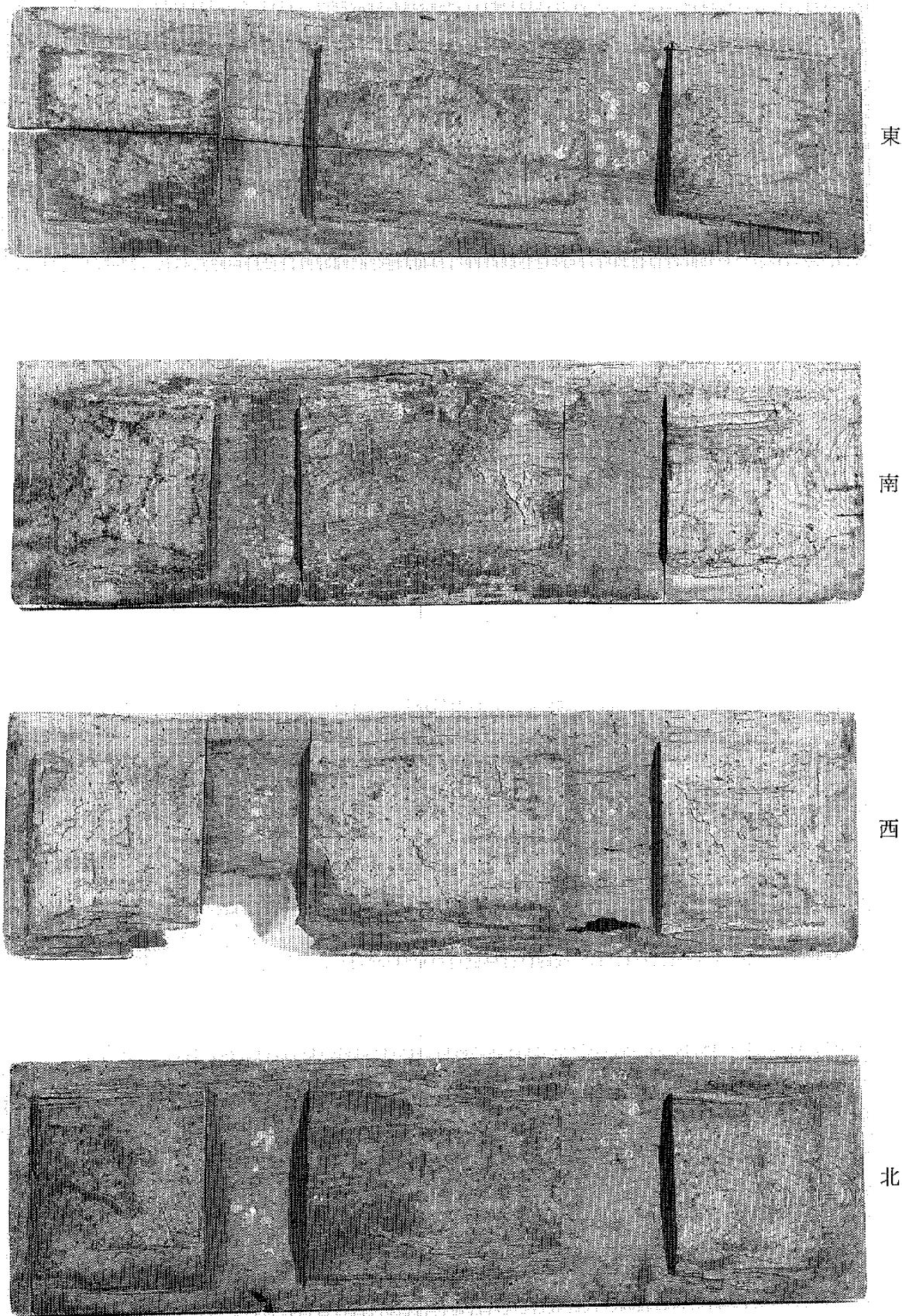
又、この羽目板のための露盤形の保存台の製作については上田墨縄堂を煩わせた。

参 考 文 献

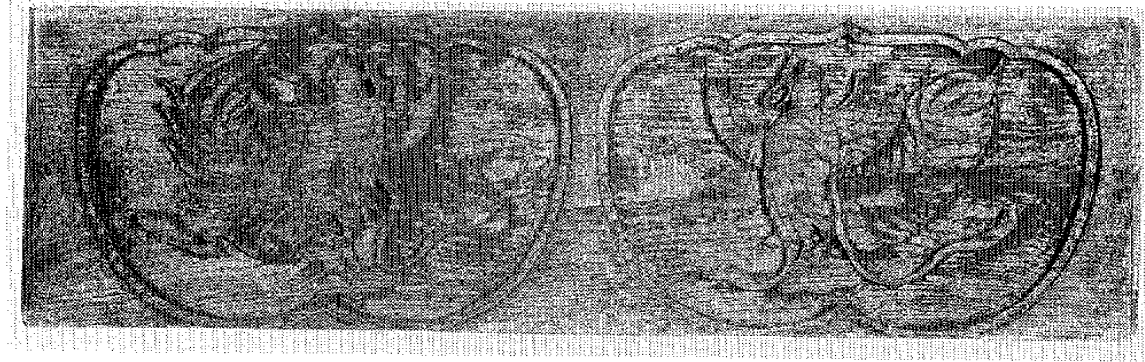
- 1) 内藤栄：中尊寺伝経蔵露盤羽目板について、ミュージアム，488号，(1992)



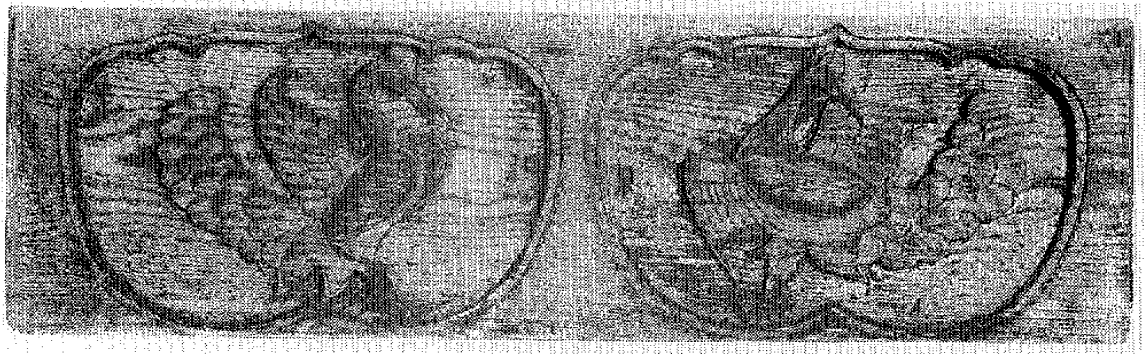
付図一 経藏羽目板表面処置前



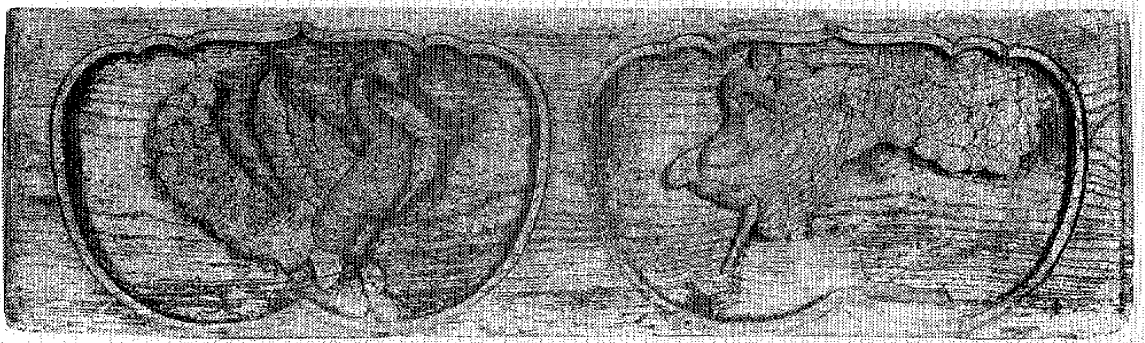
付図一 2 経蔵羽目板裏面処置前



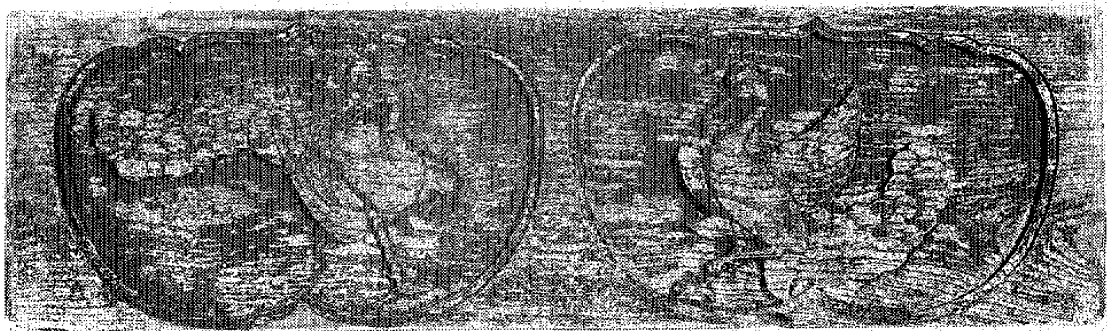
東



南

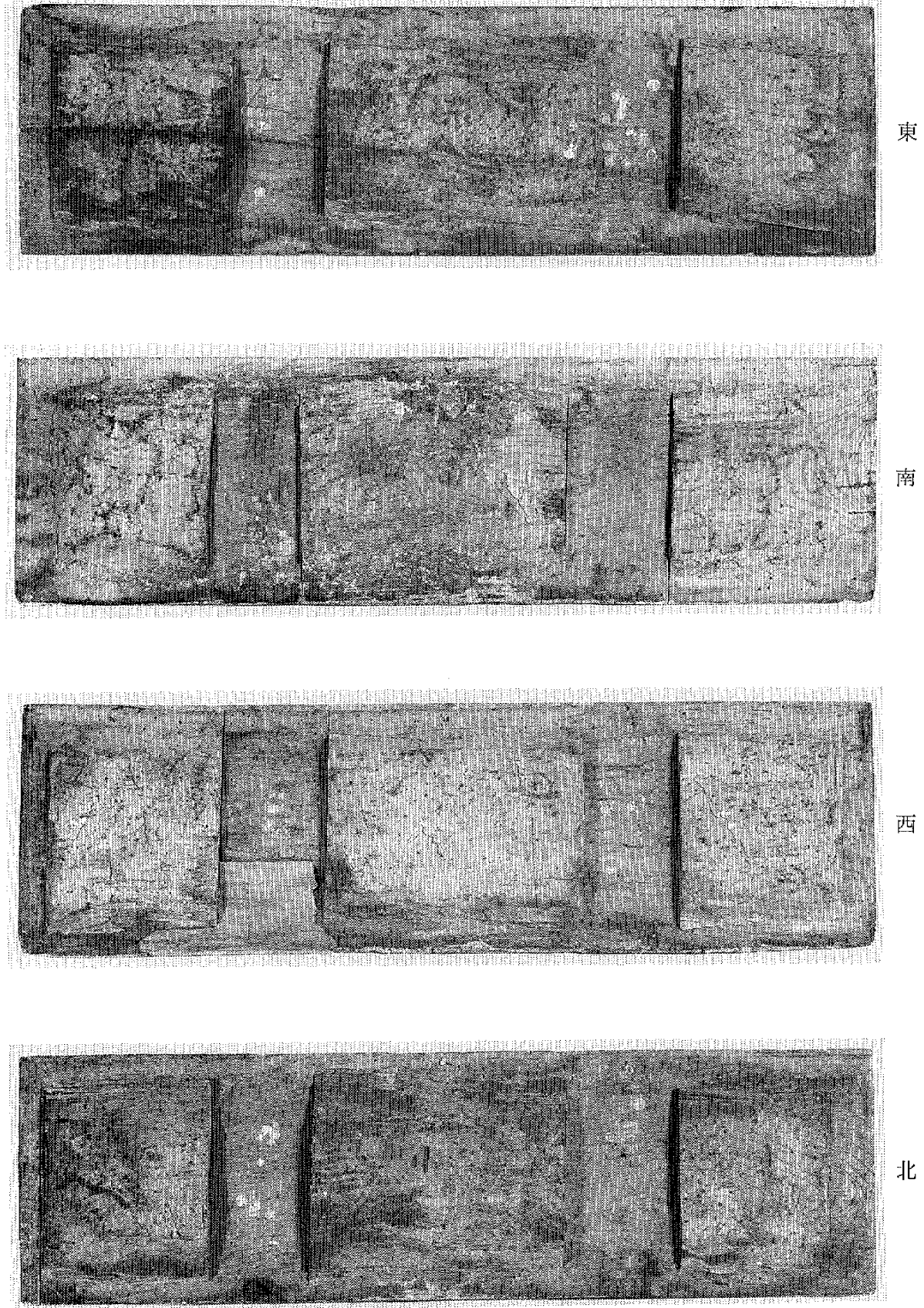


西

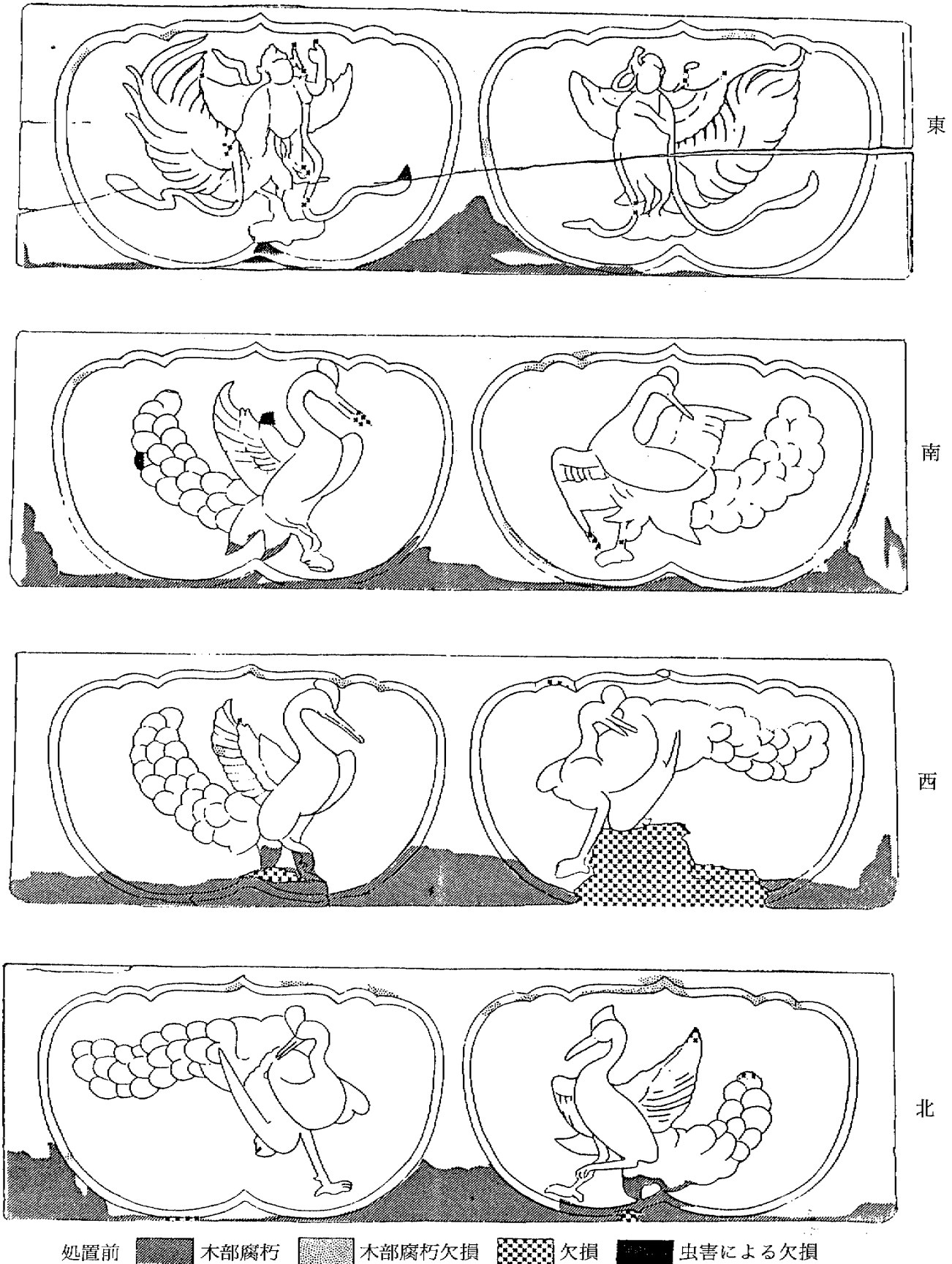


北

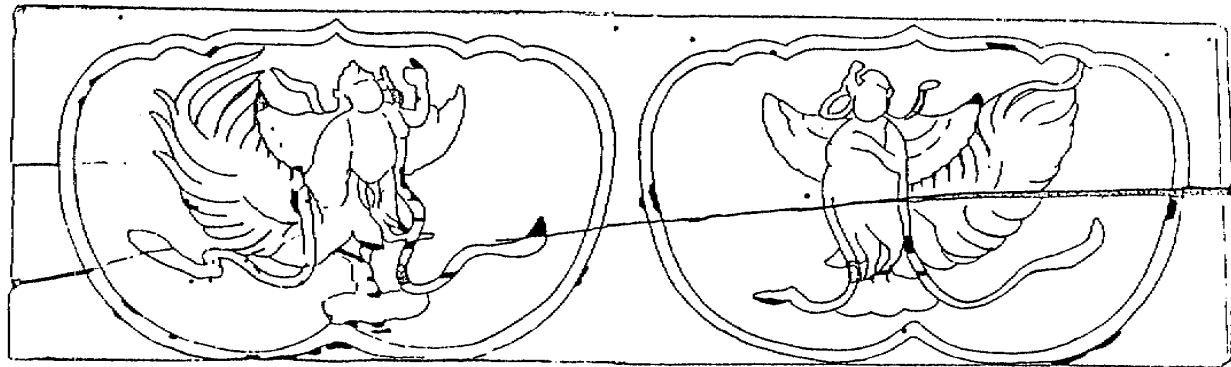
付図一 3 経藏羽目板表面処置後



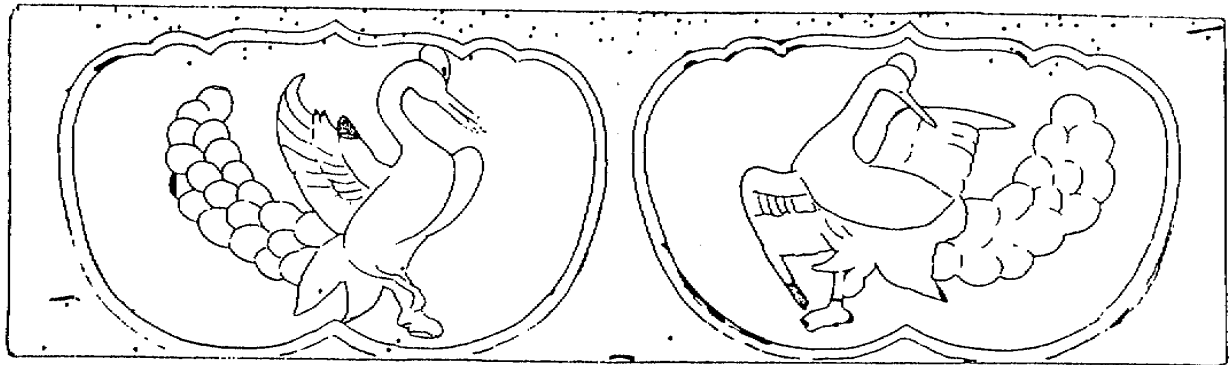
付図一 4 経蔵羽目板裏面処置後



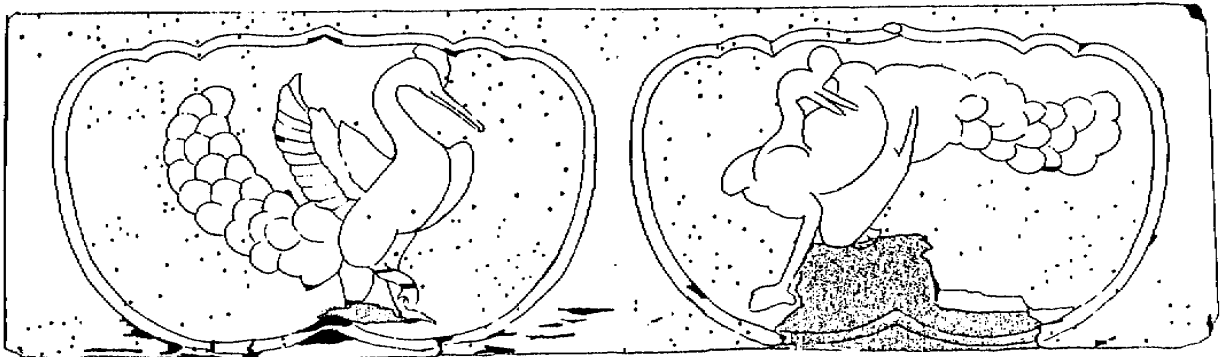
付図一5 経蔵羽目板破損図



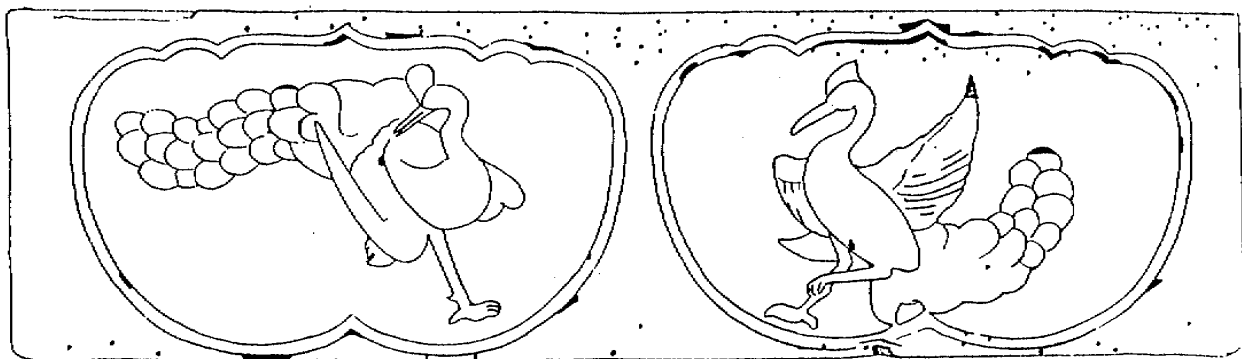
東





南



西



北

処置後  成形箇所  木片使用

付図一6 経蔵羽目板処置図

Conservation of Wooden Panels Used as Ornamental Members of Roof Decoration.

Toshikatsu NAKASATO

Four wooden panels with relieved birds made of Japanese chestnut (*Castanea crenata*) were restored. They are stored inside building and attributed to parts of the dew basin on the roof top of *Konjikido*, golden pavilion, in Iwate prefecture. The panels have cracks, missings, insect damages, and black stein caused by *Takuhon*, rubbing impression technique. The panels are painted with black color supposed to be of later application.

Treatments are as follows :

- 1 . 5% of Paraloid B72 in toluen was used for fixing black color layer, and 5% and 10% of the same solution were used for consolidation of spoiled parts.
- 2 . Japanese oak (*Quercus crispula*) was filled into the missings and fixed with thixotropic emulsion of acrylic resin by points adhering technique.
- 3 . Barusa wood (*Ochroma lagopus*) were filled in small missings.
- 4 . The surface of the filled wood was colored with pine soot to fit the originals.

The author attributed that these panels were made in order to decorate a roof of an uncertain building by an artist living in the vicinity of this temple in recent period.